

□5月26日説教(短縮版)

「祝福が子孫におよぶ」詩編37:23～40 隅野徹牧師

この箇所では歌われている、信じる者に与えられる神の守りとは、目の前にある現実を超えて与えられる神の祝福です。詩編37編の理解の鍵に、私は「未来」や「子孫」という言葉を挙げたいと思います。つまり目の前の現実を超えて、将来的に必ず与えられる神の祝福を信じて、祈りつつ精一杯生きることの大切さを歌っている。自分ひとりのことだけを祈るのではなく、苦しみの中でも、自分の後の世代の神にあっての祝福を祈りながら生きることが、クリスチャンとして大切だと教えられていると思うのです。

とくに26節の「憐れんで貸し与えた人には、祝福がその子孫に及ぶ」とある言葉は大切です。神にあって憐れみ、自分の身を削るようにして貸し与えることは、その憐れんで、貸し与えた相手であろう次世代の人々にとって、祝福が与えられるものだということです。

山口信愛教会の歩みもまた苦しみの連続でしたが、最初に種まきをされたケイト・ハーラン女史からずっと、次世代にこの教会を通して祝福される人のことを思って、苦勞を負って下さった方々があるからこそ、今があることを強く心に刻みたいと思います。自分だけが天国にいければそれで十分。後の世代のこと、未来の教会については関心がないという姿勢の人たちの集まりだったなら、山口信愛教会は133年も続いていないと私は思います。自分がいま苦しくても地道に、主の道をあゆむことがのちの世代の祝福につながる。それが教会の歴史のバトンを受け継いだ我々の心に、強く迫ってくることなのです。(終)